けに、教科書をぜんぶもちだして机のうへにつみかさね、その意氣をしめした。そしてみんなの顔をみまはして、やらうぜといふやうにうなづいた。みんなもそれに答へて、おほきくうなづいた。

石川は澁谷にたのんで、清介の隣席にかはつた。澁谷も、清介に聞きたいことがあるらしく、つまらなさうな顔をしてゐたが、二人の友情を知つてゐるので、しぶしぶ石川の席にはひつた。

みんなは、初めは拔けがけの興味も手つだつて、コツコツと鉛筆をはしらせてゐたが、たしかに疲れてゐた。しだいに目のまへがぼんやりとかすんでくる。そして後頭部が、風に鳴る電線のやうに、ぐわうと、うづいてきた。

初秋の涼風も、いまは眠さを誘ふなにものでもない。兵舍の床下にしのびこんだらしい虫の音が、チロチロと體內をくすぐるやうにきこえてくる。そのうつとりとした瞬間が、くせものであつた。さすが訓練のつはものも、睡魔とい

ふ、えたいのしれない誘惑者には閉口した……。

石川は、相變らずもつさりしてゐる。眠さに瞼が、眞赤にふくらんでゐるのに、そんな眠さなど、いつかうに平氣だといふ落着きぶりである。底しれない粘りづよさと頑張りさがあらはれてゐた。清介は、かれに負けて堪るかと、左手で足の太股をぎりぎりつねりながら、がんばつてゐた。

「須賀、この定偏といふのはどういふことだ？」

石川がきいた。

「定偏？　定偏といふのはな、彈丸が砲をとびだすときに、かう、旋條のために旋轉運動をするだらう。それから空氣の抗力をうけて、かう、かしぶるだらう。それをいふんだ。だから彈丸の旋轉運動と偏斜とおぼえておけばいい。」

石川はべつにありがたうともいはず、だまつて本を手もとにひきとると、帳面に丸をかいたり、への字をかきつらねたりした。

戰友のあひだの私語がとぎれると、兵舍内の靜けさがあつみを加へてきて、その靜寂さがまたなんともいへぬ眠さをさそつた。

「ゴッン！。」

と、にぶい音がして、突然、鐵拳の第一彈がだれかに飛んだ。毆られたのは佐野である。佐野は片肘を卓上にたてて、本を讀んでゐる姿勢のまま居ねむりをしてゐたのだ。發見者は三崎勇であつた。信洲の山奥から出てきたといふかれの腕が、斜横から伸びあがつて佐野の頭をおさへ、そのままゴッンと机におしたほしたのである。びつくりした佐野は、赤筋のはひつた目を、ぱちぱちさせた。自分がねぼけて、まへに倒れたのだらうと思つてゐるらしかつた。そして戰友の視線をいつせいにあびて、ばつがわるさうに居ずまひをなほした。みんなは佐野のその頓狂な顏をみて笑つた。けれどなにか、芯そこから笑へない悲壯なものがあつた。自分たちも眠る一歩てまへのところで勉强してゐるの

だ、ほんたうに眠つた佐野といくらのへだたりもないのである。佐野の居ねむりはさぞ氣持よかつたらう、その快感をはつきり感じることができた。そしてその快感を味はつた佐野にたいして、かすかな羨望感をさへ感じてゐた。けれど、自分たちは眠つてはならないのだ。國家はいま一人でもおほくの優秀な海兵をもとめてゐる。自分が落伍したらどうなるのだ。それは一個人の不名譽にとどまらない、國家にたいする不忠である。もはや身を軍籍にささげた以上、最大をつくして優秀な水兵にならなければならない。一時的なねむさなどはなんだ。この一時間、この三十分が皇恩にむくいたてまつる、なによりの努力ではないのか……。

かれらの信念は、眠さとたたかつた。なぐつた三崎も、なぐられた佐野も、ふたたび默つてコッコッと、鉛筆をはしらせはじめた。

兵舍の夜はあくまで靜かである。

海征く合唱

「須賀と石川、小野寺助手に、挨拶にまゐりました。」

清介の聲は、入團當時の蚊のなくやうな聲とちがつて、高からず低からず、腹の底から凛と澄みとほつてゐる。それもそのはず、けふは、いよ〳〵晴れの退團の當日なのだ。

ピカピカ赤銅色に光る顏もさすがに嬉しそう。今朝つけたばかりの、眞一文字のスバナー。ピンとかくばつた帽子。すべてが今日の榮譽を物語つて、ひときは誇らしげに輝やいてゐるのである。

清介は一歩すすんで、

「ながいあいだ、いろ〳〵お世話になりました。自分たちも元氣で、きつと立派に御奉公いたします。小野寺さんも、どうぞお元氣で……。」

いざ、お別れだと思ふと、なにか鼻さきがヂーンと白らんでくる。

「おめでたう。いままで鍛えられた不撓不屈の精神をもつて、しつかりやつてくれ給へ。軍艦は君たちを待つてゐるぞ。」

「はいッ！。」

二人の十五度の敬禮も、すつかり板についた軍人のものだ。小野寺助手は、一兵にすぎない自分にまで、挨拶にきてくれたことを思ふと、この後輩の兵達の心情が嬉しくてならないのである。

「いよ〳〵退團だな。」

つか〳〵と立つてきて、清介の肩に手をかけて、

「どうだ、待ちどほしかつたらう。」

「はいッ……。」
と、清介は聲が出ない。
「石川、おまへは？」
「はいッ――。」
「なんだ、二人ともただ、はいッぢや分らないぞ。」
「毎日が長いと思ひました。けれど、また短かいとも思ひます。」
と清介は、ほんとうにそう思つて言つた。
「さうだな。しかしまア、よくやつてきた。お前たちの中には、不幸にも身體を惡くして中途退團者もあつたが、無事にかうして團門を出られるのはなによりだ。だがまた、明日からすぐ艦上勤務だ。身體に注意して、大ひに頑張れよ。」
二人は、まばたきもせずに前方を直視してゐる。その眼光には、烈々として

海軍魂がもえ映つてゐる。この短かい期間の訓練にして、よくこれまでになつてくれた――小野寺は頼もしい二人の姿を見てゐるうちに、胸に熱いものがこみあげてくるのであつた。
「今日は始めての外出のわけだが、どこへ行くのだ？」
「はい、集會所に寄つて、それから蒲田の知人の家を訪ねます。」
「二人でか？……。」
「はい、同郷の人の家ですから、一諸に行くのです。」
「東京に知り合ひがあるのはいいな。集會所へ寄つてて、約束の時間に遲れるなよ。あそこは娯樂設備は何んでもそろつてゐるし、大宿泊所から風呂まであるからな。とにかく久しぶりで寢そべる青だたみの味は、また格別のものだからなあ――。ゆつくり休息して、明日からの勤務に馬力をかけるんだな。暇があつたら手紙をくれよ。われ〳〵は、君たちの消息を知るのが、いちばん嬉し

いことなんだ。」

「はいッ、手紙は忘れずに書きます。では、須賀と石川、歸ります。」

頼もしげに見送る、小野寺助手の視線を背後にあびながら、二人は衞兵伍長室を出た。

それから、もう一度、いまはなつかしい兵舍に入つて見た。

がらんとした居住區のなかはきちんとして、獨り電燈だけが風に搖れてゐる。衣囊入、釣床格納所、銃架、手箱、棟木、ふとい壁の柱、すべてがなつかしいにほひだ。

「須賀、ここにゐたのか？」

驅足の靴音がしたかと思ふと、砂崎高政がうしろから聲をかけた。

「軍人に、センチメンタルは禁物だぞ。さあ、出かけやうぢやないか。」

そう云ふ砂崎の腕には、清介たちと違つて錨の記章がついてゐる。その腕

を、彼はこれ見よがしに振りあげるのだ。一人前になれた嬉しさに、心がはづんでゐるのであらう。

三人はこれから、かつての約束どほり、齋藤廣造の家を訪問しようといふのだ。四、五日前の手紙に、齋藤さんは今日の日に、工場の方を非番にして、彼等の訪問を待つてゐるとあつた。

砂崎は、さつきはあんな威勢のいい口を利いたくせに、練兵場の眞ん中までくると、くるりと踵を返して、兵舍に向つて擧手の禮をするのだつた。やつぱり、兵舍に對してなつかしい感情はもつてゐるのだ。

二人もそれにならふつた。自分たちをこれまでにしてくれた兵舍、そしてまた、明日からは新たに來る、自分達の後輩の新兵が入る兵舍。

清介は、ふと、故郷の遠藤喜四郎のことを思ひ浮べた。

「な、須賀。わしらは艦艇乘員になつたら、すぐ戰爭に行けるんぢやろか？」

と、石川は、むづ〳〵してゐるやうな顏つきで言ふのである。
「わからないな。分隊長も言つてたけれど、砲火を交へるばかりが海軍の仕事ぢやない。この大東亞共榮圈の輸送力確保も、われわれの任務だからな。」
「砂崎たちは、甲板に居るんだから景氣がいいが、おれたちは機關部だからなあ、仕事が地味だよ……。」
「機關部だつて甲板部だつて、海戰が始まれば同じだよ。しかし、石川考へてみろ、たとへ海戰がなくつたつて、あの巨艦の胴ッ腹に入つて、艦の心臟部の仕事が出來ると思へば、こんな嬉しいことはないぢやないか。おれは、もう腕がなつて仕樣がないんだ——。」
清介の張りきつた語調には、まんまんたる鬪志と自信が、みなぎつてゐるやうだつた。
三人が、胸をふくらませて團門の近くまで歩いてくると……、

「おーい、須賀、石川ァ……。」
練習艦の下で、五、六人の戰友が固まつて、こつちを呼んでゐる。
「なんだァ！」
石川が、持前のぶつきら棒な大きな聲で、口の前に手の輪を作つて訊きかへした。
「ヨ」「イ」
須藤らしいのが、手旗信號を送つてよこす。三人は驅け出した。戰友は、原佐野、須藤、田村、庄司、澁谷の六人である。
「なんだ、練習艦の前で、送別會でもやらうッてのかい？」
「うん。いま、海ゆかばを合唱しようといふことになつたんだが、一人でも多い方がよからうてんでな。」
「よし、大ひに贊成だ。歌はう……。」

九人は、ずらりに岸壁にならんだ。水兵服が風にふくらむ。

「いいか、やるぞ。一、二、三……。」

原の發聲で、彼等は今こそ精一杯、腹の底からの聲を張り上げて、歌ひ出した。

海ゆかば、水漬くかばね
山ゆかば、草むすかばね
大君の　邊にこそ死なめ
かへりみはせじ

おお、彼等の合唱は、高く低く海にこだまし、大空に響いて流れてゆく。くりかへし歌ふ九人の海の若人の胸は、感激にふくらみ、たくましい紅顏には決意の涙が溢れてゐる。

彼らの胸中にえがき出されるものは世界地圖だ。ああ、巨艦に乘組んで七洋

を征覇し、暴戾米、英の息の根をとめる快擧は、われわれの手で成しとげるのだ。その日はつひに來た。

日本よ、世界よ、聞け、この合唱を……。

海ゆく九人の合唱は、次第に力づよく、晴れわたつた海面をすべつて、天空にこだまし、どこまでも、どこまでも流れてゆくのであつた。

（終）

昭和十八年二月五日印刷
昭和十八年二月十日發行

海兵團

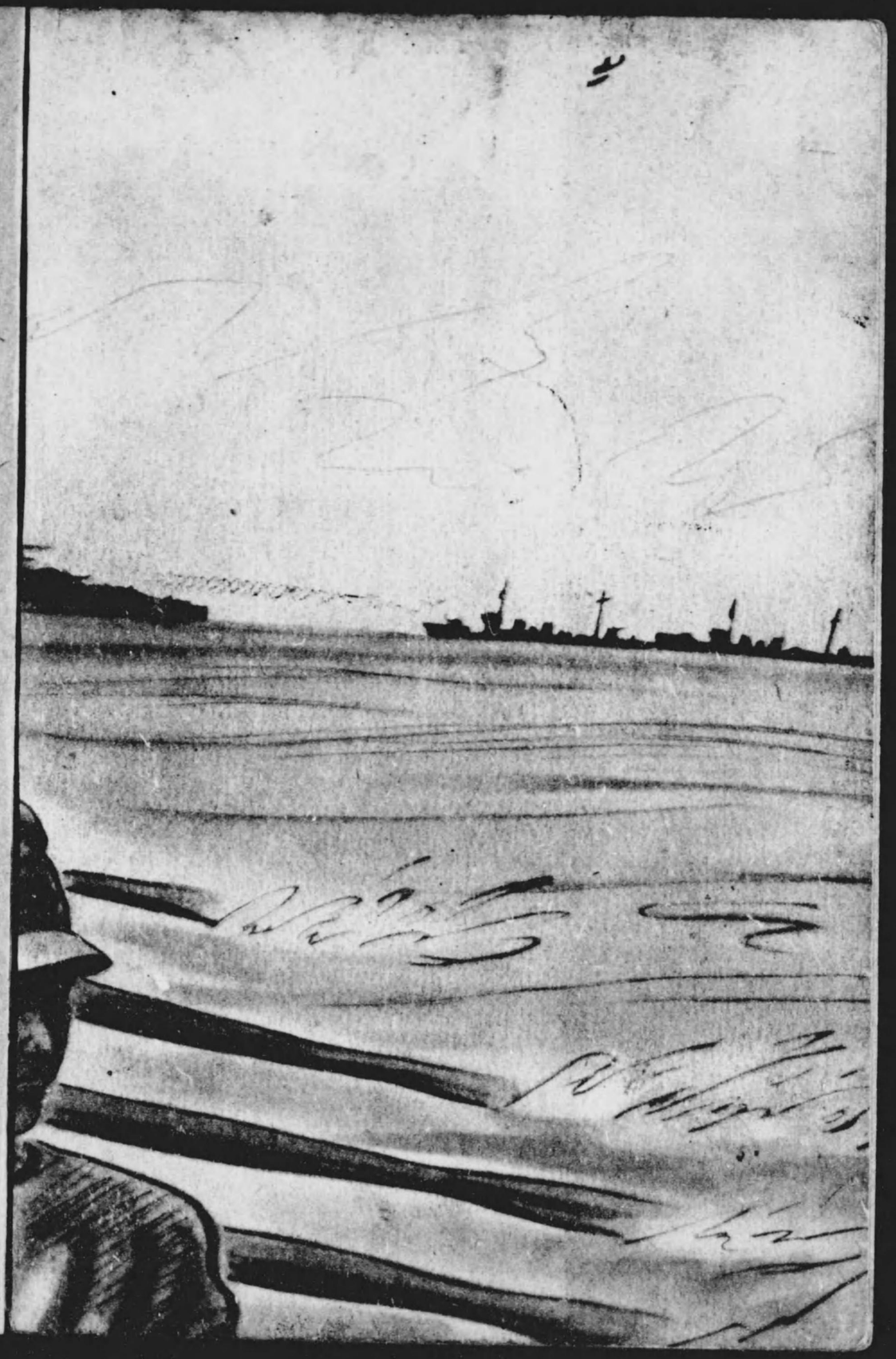
五、〇〇〇部
(特)定價一圓
送料八錢

著者　關口好雄
發行者　出口良雄　横須賀軍港中里町二二八
印刷者　正木忠義　東京市神田區錦町三ノ二六
配給元　日本出版配給株式會社　東京市神田區淡路町二ノ九

認承協文出
ア190539

發行所　横須賀軍港中里町二二八
會員番號一〇六一三五番
海國社
振替東京六九〇九二番
電話横須賀一六五四
東京事務所　東京市神田區神保町一ノ六九

行印所刷印木正（番四八三三東東）



932
189